

疎開学童の生活

寝静まった枕元で、教員や寮母が、子どもたちの繕い物をしています。(右)
『アサヒグラフ』
第43巻第5号(昭和19年8月)



畳敷きの涼しい教室で、みんな仲良く勉強しています。(左) (同上)

戦時下の小学生3 ～東京都戸山国民学校土浦学寮～

アジア太平洋戦争の末期、アメリカ軍の本格的な本土空襲に備えて、東京・大阪・名古屋・横浜など大都市の国民学校初等科の児童を地方都市や農村に個人的に(縁故疎開)或いは集団的に(集団疎開)移住させることになりました。土浦にも1944(昭和19)年9月、戸山国民学校(現東京都新宿区立戸山小学校)の3・4年生が疎開して来ました。

学童疎開

学童疎開は、文部科学省の『学制百年史』によれば、次のような経緯で実施されました。

1943年末からは、アメリカ軍の本土空襲に備えて、学童を戦禍から守るため、国民学校初等科の児童の「縁故疎開」に便宜を図る措置が、採られるようになりました。更に、1944年6月にアメリカ軍がサイパン島に上陸すると、同月末、政府は、「一般疎開ノ促進ヲ図ルノ外特ニ国民学校初等科児童ノ疎開ヲ強度ニ促進スル」ことを閣議決定しました。

この決定では、学童疎開は、縁故先への疎開を先ず勧奨し、縁故先の無い者に対しては、「集団疎開」の方法を採ることになり、同時に、疎開の具体的方法として、「帝都学童集団疎開実施要領」が決定されました。対象となったのは、国民学校初等科3年生から6年生までの児童で、保護者の申請によって、疎開させることとしました。学童疎開を行なう都市として、7月の文部省通牒で、東京都・横濱・川崎・横須賀・大阪・神戸・尼ヶ崎・名古屋・門司・小倉・戸畑・若松・八幡の13都市を指定し、受け入れ先としては、それぞれの近接県が選ばれ、8月から学校単位の集団疎開が始まりました。更に、翌1945年3月、政府は、「学童集団疎開強化要綱」を閣議決定し、低学年児童にも、父兄の希望により参加を許し、4月には、京都・舞鶴・広島・呉の各都市が追加され、1945年の疎開児童は、45万人に及んでいます。

疎開先における児童の生活は、貧しいものでした。食費は、当初、1人当たり月20円で、土地建物借受料は、5円で

したが、1944年9月に、文部省は指令を改め、旅館を宿舍とする場合には1ヶ月の食費を25円と、その他の場合のそれを23円以内とし、特別の事情のある場合には、文部大臣の承認を受けることとしました。保護者は、生活費の一部として、月10円を負担しました。児童は、食糧や薪炭の調達に追われることが、教職員も、生活物資を集めるために奔走することが、多くなりました。

疎開先での教育施設として、国民学校や中等学校などの教室或いは公会堂・寺院・寮舎・農舎などが利用され、それらは、疎開する側の学校の分教場として取り扱われました。疎開児童の教育には、主として疎開側の教職員が当たり、疎開側と受け入れ側の両方の教職員が、相互に相手校を兼務する形で、両校の児童に接していました。児童数は1宿舍100人を単位とし、2学級に編制し、訓導2人、寮母5人(内1人は看護婦)、作業員3人、寮務嘱託員3人、嘱託医1人が配置されました。疎開児童の保健衛生について、文部省は、1944年8月に、「疎開学童ノ保健衛生ニ関スル件」を指令し、受け入れ側の婦人団体・医師会・歯科医師会などが協力して対応しました。

集団疎開に要する経費は、保護者の負担分を除いた、疎開側自治体の負担額に對しては8割を、受入諸費に對しては全額を国庫が負担しました。1944年度の国庫補助予算は、1億100万円、1945年度のそれは1億4000万円でした。

1945年1月には、政府は、集団疎開の継続を閣議決定していました。が、同年8月、疎開児童たちは、それぞれの疎開先で終戦の日を迎えました。

土浦館と戸山国民学校児童

1944年8月、大都市から地方都市や山村への学童の集団疎開が始まり、茨城県内にも東京の学童が多数疎開して来ました。土浦には1944年9月、戸山国民学校の3・4年生270人が、教員7人(男2・女5)、寮母11人、炊事婦9人とともに疎開して来ました。疎開先は、川口川沿いにあった旅館土浦館です。

当時、川口川には、土浦城(現亀城公園)の裏門の土橋からはじまって、搦手橋・桜橋・祇園橋・匂橋・朝日橋・八千代橋・柳橋・開門橋と9つの橋があり、朝日橋から開門橋までは、霞ヶ浦通運の蒸気船が航行できるように、橋桁が高く組まれていました。特に八千代橋は、又の名を太鼓橋と言ひ、水面より4.5mの高さに見事な円形を画いていて、夏には、子どもたちが、高い欄干の上から川面を目標けてダイビングを楽しんでいました。これらの橋は、川端の柳とともに川口川の風物となっていて、本校旧職員の永山正は、1925(大正14)年4月に着任した際に、「水と柳と橋との、絵のような風景を初めて見て、水の都土浦を実感した。」と述べています。その八千代橋の袂にあった土浦館は、以前は、「三味線屋」という名の船宿でしたが、1895(明治28)年に、木造3階建に建て替えられ、名前も「旅館土浦館」と改められました。「三味線屋」時代から長塚節などの文人墨客が多数訪れていて、土浦の名旅館の1つでした。

土浦館では役所の依頼を受け、館主の染谷恒(つね)さんは、辛い思いをしている子どもたちのために、と旅館業を廃業し、長年尽くしてくれた従業員にも泣く

泣く辞めてもらい、旅館を「東京都戸山国民学校土浦学寮」としました。染谷さんは、「東京の子は勉強をするから。」と資材不足の中、当時、国民学校5年生であった娘の愛子さんの体格を参考に、机などを作り、受け入れ準備に当たりました。

「東京都戸山国民学校土浦学寮」となった
旅館土浦館（左）
（土浦市立博物館第40回特別展図録
『町の記憶—空都土浦とその時代』）



学寮前での戸山
国民学校児童
（右）（同上）



戸山の子どもたちは、最寄り駅で親と別れ、疎開先の土浦館に遣って来ました。初めのうちは遠足気分でしたが、2、3日後にはホームシックに罹り、夜になると、皆、布団の中で泣いていました。教室は、土浦国民学校（現土浦小学校）に間借りをしましたが、教室が足りないもので、2つの学年が、交替で1日置きに登校し、学校に行けない日には、学寮で勉強しました。「体操」は土浦城の本丸跡の広場で行いました。

当初、学寮の食事には、ワカサギや納豆などは十分にありましたが、食器類が足りなかったため、弁当箱の蓋におかずを、身にご飯を入れていました。しかし、次第に食糧事情が厳しくなり、おかずが少なくなつて、さつまいもやジャガイモが主食の食事が多くなりました。そのため、面会に来た親が、お手玉の中に煎り大豆を入れて持って来てくれて、それを1粒ずつこっそりと食べていた子も居ました。中には、甘いので絵の具を食べた子も居ました。

空腹。おやつの無い日々。規則に縛られた生活。慣れない共同生活を送っている子どもたちの最大の楽しみは、親との面会でした。列車の切符が買えず、ごくたまの面会でしたが、子どもたちにとっては、何より嬉しいことでした。しかし、面会は、別れる時の新たな悲しみを生みます。旅館の前の川口川に架かる八千代橋を親が渡り切り、姿が見えなくなると、子どもたちが一斉に泣き出すので、この橋は、「涙橋」とも呼ばれるようになります。親からの手紙も楽しみでしたが、子どもたちからは、全てが検閲を受けていましたので、親には子どもたちの本当の状況は伝わっていませんでした。

子どもたちのもう1つの楽しみは、予科練生や飛行予備学生、海軍航空隊の隊員たちが、慰問のため、時々遊びに来てくれることでした。彼らは、子どもたちにとつては、優しいお兄さんでした。休日には、お菓子などを持って、遊びに来てくれました。学寮にあったオルガンで伴奏をしてくれて、一緒に歌を歌ったり、ゲームをしたりして、楽しい時間を過ごしました。時には、休日に寛ぐために借り上げていた下宿に、何人かを呼んでく

れて、その頃には珍しかったパイナップルの缶詰を腰の短剣でクルクルと開けて、食べさせてくれることもありましたが、しかし、優しいお兄さんたちは、別れの言葉も無く、急に来なくなりましたが、その意味を知ったのは、終戦後のことでした。

1945年に入ると、空襲が激しくなり、警戒警報・空襲警報が鳴る毎に、子どもたちは、学寮の防空壕へ避難しました。夜中に警報が鳴ると、2・3階に寝ていた男子が、女子の寝ている1階に降りて来て、男子は西に、女子は東に枕を置き、互い違いに寝て、空襲に備えていました。

群馬県への再疎開

1945年3月10日には東京大空襲があり、4月13日の空襲で、戸山国民学校の校舎も全焼しました。5月になると、海軍航空隊に近い土浦は、空襲を受ける虞があるとのことから、子どもたちは、群馬県に再疎開することになりました。焼け野原となった東京を子どもたちには見せないように、と土浦駅から友部駅へ、そこから水戸線で小山、小山から両毛線で高崎へ出て、上信電鉄で富岡へ、と乗り継いで行きました。疎開先は、北甘楽郡吉田村南蛇井（現富岡市南蛇井）の桃林寺という山寺です。山寺のため水が不足し、入浴の日には山門前からバケツリレーで水を運びました。更に、水不足による不衛生や栄養不足のために、蚤や虱が髪の毛やシャツに付き、子どもたちを苦しめました。寮母たちが、衣類を煮沸したり、女の子の髪を梳いてやつたりして、何とか凌いでいました。

食事は、土浦よりも更に粗末なものになり、子どもたちは、勉強の合間に、一

品でも多く、とアサザやシロザなどの野草の葉を採って来ました。群馬県は養蚕の盛んな地で、子どもたちは、農家の手伝いに行き、桑の枝の皮剥ぎや雑草取りなどをしました。そして、その晩はお風呂に入れてもらい、晩ご飯をご馳走になりました。子どもたちは、これを「お呼ばれ」と呼んで楽しみにしていました。終戦の日には、教職員と児童全員とが、本堂の前に整列してラジオを聴きました。子どもたちも泣いていましたが、これで東京に帰れる、と分かると、次第に嬉しさに変わって来ました。9月には、親がそれぞれの子を迎えに来て、1年に及ぶ学童疎開も、終わりを告げました。

※土浦市の学童疎開

土浦市にも次第に空襲の危機が迫ってきたので、市は1945年7月27日付で、学童の縁故疎開を勧奨している。そのため、染谷愛子さんは、上大津村（現土浦市手野町）に1ヶ月間疎開し、終戦の日を迎えた。

※参考文献（戸山国民学校児童関係）

「土浦発 未来への伝承133 戦時中の旅館土浦館」『土浦学寮』だっくら広報つちうら 2016年8月2日発行

「土浦館」東京から土浦（学童疎開した子どもたちの記憶）（土浦市立博物館閲覧コーナー）

（高21回 松井泰寿）

※土浦市立博物館第40回特別展

「町の記憶—空都土浦とその時代」

5月6日（月）まで開催されている。

霞ヶ浦航空隊と土浦航空隊。この2つの海軍航空隊と関わりを持った町の様相が紹介され、その歩みも辿られていて、本校所蔵の資料も展示されている。